

氏 名	金 善 泰 (私 ヲテ)		
学位の種類	博 士 (芸 術)		
学位記番号	甲第 27 号		
学位授与日	平成 22 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	<b>韓国画の再考察 —金殷鎬の作品を中心として—</b>		
審査委員	主査 教 授	島 尾	新
	副査 教 授	近 藤	秀 實
	副査 教 授	中 野	嘉 之
	副査 学習院大学 非常勤講師	金	恵 信

## 内 容 の 要 旨

近代以前の韓国の絵画は、中国画から思想、材料、様式、技法など様々なものを受け入れて発展してきた。近代に入って、日本から西洋画と言う単語を受け入れ、独自の韓国絵画を指すために東洋画あるいは韓国画という呼称を作り、日本から受け入れたものを払拭するために文人画・水墨画へと回帰した。

当時は当然のことと受け入れられたかも知れないが、それが様々な問題を呼び起こしている。文人画・水墨画という朝鮮王朝末期の絵画へと回帰したことは、敢えて言ってしまうえば、韓国画の進化が近代になる前に止まってしまったと自ら表明していることにもなるのである。しかしそのような絵画は、百年が過ぎた今日では説得力を失ってしまった。ではこれからの「韓国画」は、どうすれば良いのだろうか。今まで「韓国画」を勉強してきた私は何を描けば良いのだろうか？この問題から、画家にとっての基本的なアイデンティティまでを考えねばならなくなった。そのためには、いったん韓国の近代の絵画史を冷静に振り返ってみる必要がある。

このような歴史の中で、韓国の絵画が他国の影響を受けながら発展してきたと言う主張は当然である。特に近代以降は、嵐のような歴史のなかで画風も激しく変化する。私は、その変化のなかにあった韓国画を見つめてみたいと思った。植民地時代の日本画と韓国画の関係も、政治的な理由と被害者意識だけではなく、より客観的な観点から見なければならぬと思ったのである。

本論文では、金殷鎬の作品を時代に従って分析しながら、近代の韓国画について考えていきたい。金殷鎬は、朝鮮王朝末期の伝統を受け継ぐ画家と称され（宮廷画家ではないが、王様の肖像画を描いたのでそう呼ばれている）、また植民地時代には日本へ留学して新たな画風を身につけ、朝鮮画壇の中心的な人物となった。解放後の一時期は親日派と見なされて不遇だったが、晩年には名誉ある生活へと復す。彼が育てた多くの弟子は、解放後の画壇で重要な役割を果たした。金殷鎬は、いわば韓国近代絵画史を体現する人物であり、その生涯と作品を見てゆくことによって、韓国画の重要な一面を知ることができる。

本研究の結果は以下のようにまとめられる。

1. 韓国では、金殷鎬の作品は日本画の影響を受けているとされている。そこで、金殷鎬と菱田春草などの日本人画家の作品を比べた。日本画の特徴が見られる場合もあるが、同じ時期に描かれた他の作品と見比べると、筆使いや色彩が異なる場合があることから、必ずしも日本画を真似したものとは言い切れない。日本画の影響を受けているというより、金殷鎬が日本留学を通じて、日本画から刺激を受け、独自の彩色画を完成したものと思われる。
2. 韓国で東洋画のことを韓国画と呼び始めたのは、解放以降のことである。民族の主体性を表す韓国画にしなければいけないと言う論議が高まり、1980年代から公けに韓国画と呼ばれるようになった。しかし、現在でも、韓国画と東洋画は区別されないまま使われている。韓国の美術大学を見ても、韓国画科、韓国画学科、東洋画科と様々な名称が使われており、カリキュラムでも素材でも相違はほとんどない。

解放以降、彩色画は日本の残滓と見なされたことから、文人画や水墨が注目されるようになり、様々な実験を通じてその可能性が再検証された。その後、韓国画は水墨画を中心に発展していった。しかし水墨画による発展が、果たして韓国画の発展とも言えるのかどうかは疑問である。彩色画＝日本画という短絡的な認識は歴史的な背景から推測できるが、それ以外の要因についての、より広い視野での分析はなされていない。このようなことが、韓国的美を「色」として表すことが出来る彩色画を後退させた理由の一つではないかと思われる。